

とり、これを串にさして焼いて食うのが何よりのご馳走だった。また、この松の幹に張りついている黒いコケも食った。人間が生死の境のような環境の中では教養もなければ体裁もなくなってしまうものだ。生き延びるためにはどんなことをしてでも食べるものを探さなければならなかった。

シベリアの冬は長く夏は短かった、九月半ばには白銀の世界になってしまう。冬のシベリアの空はよく澄んでいた。澄んだ空に月が皎々として輝いていた。月を仰ぎながら私は思った。故郷のあの山や川も照らしてくれるんだろう。私は月に祈った。まだ元気でいてくれるなら、年老いた父母に必ず伝えてほしい。私はまだ生きている。しかし遠い祖国の肉親の幸せを祈りながら、この地シベリアで無念の涙の中で凍土の土になるだろうと。

無 題

静岡県 吉 田 吉 治

光陰矢のごとし、戦後早くも四十数年を経たが未だに忘れることのできないシベリア抑留生活。強制労働、それは人間として生きる最低生活だった。それが未だにハッキリと思い出せる。昭和十八年、宝清の騎兵連隊に入隊し、その後大代河に移駐したが、饒河のすぐ前はウスリー江で、対岸のソ連の山々には多くのトーチカ陣地があり、銃眼が夕日に照らされ薄気味悪く見え、その向こうにシベリア鉄道が走り、ピギンスカヤ市も望見された。後方は完達山脈によって遮られ宝清との連絡もままならぬ辺境の地であった。

それでも毎日毎日の猛訓練に明け暮れていたが、戦況など知る由もなかった。東安、牡丹江のような鉄道沿線にいと、兵力の移動を見て感ずる点もあったろうが、井戸の中のカワズとは我々のことで、まだまだ

関東軍の健在を信じて我もし戦わば戦車、飛行機を動員して近代戦となるだろうと信じていた。

敗戦となり下がり、九月一日、軍旗を奉焼して武装解除を受け、拉古、海林を経て牡丹江より内地に帰るとだまされ貨車に乗り出発したが、鉄道沿線には日本軍の砲、輜重車が散々な姿で横倒しになっており、その上には非情にも粉雪がサンサンと積もっていた。いよいよソ連領に入り、東か西かということになり、窓から見る太陽のぐあいではどうしても北へと進んでいる感じだ。そしてある日とまった駅は、ビギンスカヤ市の近くであった。窓から見るとウスリー江の向こうに饒河の町も見え大楠山も見え、そして遙か彼方に大代河の山々も見えた。なんとも言われない気持ちであった。一体我々はどうなるであろうか、もうどうにでもなれという気持ちであった。

貨車は少し走ってはとまりとまるとなかなか動かなかった。戸は開けてくれなかった。用便は入り口のそばでするのだから臭いが、だれ一人文句を言う人もなかった。大分走ってからウズラ豆を煮たのを一度支給

されたが、食事は何もくれなかった。海林にいたとき、付近の畑より取り、内地に帰るとき食べようといって貯めていた大豆のいり豆を一粒一粒大事に大事に取り出して食べた。

着いたところはライチハ第十九分所であり大きな露天掘りの炭坑であった。我々は一番最後であったが、七、八千人が同じ収容所で暮らすことになった。私たち以外はブラゴエシチェンスクより歩いてきた人たちで「汽車の通るところまで歩け」と言われ、やっと汽車の音がするので喜んだら、それは石炭輸送の貨車の音であったという。だまされどおしの行軍であったようだ。この人たちは真新しい冬服を着ていたが、我々は夏服であった。そして防寒被服もなく、ろくな食事も与えられず冬を迎えたが、この冬は一番多くの人が死んだ。

満州より持っていたむしろ一枚を敷き、その上に寝るが寒くて寒くて腹が減るし、話する元気もなかった。作業衣は石炭の粉で真っ黒に光る。下着も真っ黒、シラミがたくさんつくし、南京虫に刺され夜は安

眠などできるはずがない。朝早く起こされ（起こされるといふより、寝ないでまんじりして夜が明けた）支給される朝食と昼食を一度に食べるが、それでも満腹感などなかった。作業に出るが、作業ごとに並ぶが人数を数えるのが大変で、五列に並んで幾度も数える。その間、我々は足が冷えるからバタバタ足踏みして待つのである。

昼食のパンは朝食と一緒に食べたからパンなし。スープとは名ばかり。十人に一匹の割合で支給されるのを煮るが、ところどころになるまで煮る。食事当番が作業場付近から取った野草（野菜ではない、ヨモギ、アカザ、タンポポ等を入れるが、毎日取るのでこの野草もなくなる）を入れるので色は真っ黒。味つけは岩塩であるが、底の方に砂が沈んでいるので、砂を飲まないように静かに飲む。ただこれだけ。スープ一杯が昼食。仕事は重労働、栄養失調でやせて骨と皮ばかりになってしまった。ものを考える気力がなくなってしまう。朝隣に寝ていた戦友が冷たくなっていった。私もとうとう下痢になる。血便が出て熱が出てとうとう病室

に入った。病室といっても何もなし。ただ横になって寝ているというだけである。一日十八回便所へ行つたが、何も出るものがない。ただ白い粘液がほんの少し出るだけだったが、なかなか時間がかかる。便所でしゃがんでいると、元気のよい人が隣へ来て小便をするから、小便のとはちりが尻へかかってぬれるが、拭くものもなし。薬もなかったが、樟の木を煎じた汁を飲ませられたが、私は作業へ出る者へ頼んで木炭を持つて来てもらい、それを粉にして飲んだ。二日後私が入室したのを聞いた部隊の衛生兵高橋さんが来てくれて、そつと「これを飲め」とクレオソートを三、四粒くれた。つんと鼻をつく匂い、薄苦い味、のどを通って胃の方へいくのを感じながら、これで治るようにと神に祈つた。このときほど戦友のありがたさと薬を信じたことがない。もしだめだったらマキキロを飲もうかなと思つたが飲まずに済んだ。そして元気になった。

夜盲症になった人は気の毒であつた。夜、便所へ行けなくなり、部屋の入りに口で我慢できなくなり、ついもらしてしまふが、元気のよい連中には文句を言われ

るし、部屋の中は便所の臭いでいっぱいであった。

ある日、コルホーズの作業に行ったことがある。馬鈴薯の収穫だった。たくさんの芋がとれたのを見て「食べたい、食べたい」と思っていた。ロシア人がいないときだれとなく生芋をかじったが、いがらっぽくてとても生では食べられなかった。みんながっかりした。帰りに持って帰ろうとしたが、身体検査されて一つも持ち帰ることができなかった。

また、大豆の収穫作業のときは、冬の日であったが、ロシア人の監督が畑の畝に一列に並ばせ作業の手順を教え、この畝が終わったら帰ってもよいという約束をした。仕事は簡単で、立ってある大豆を棒で倒せばよいのである。我々の倒した大豆はコンバインで脱穀していく作業であった。「きょうの監督は話がわかるんだ」と思い、シベリアの広さを知らない我々は簡単に考えすぐ作業は終わると考えた、みな早く終わって帰ろうと思いきや倒しながら進んだ。一山越えて前を見ると遙か彼方まで畝が続いている、急に力が抜けたが、ダワイダワイで前へ進む。一山越えて前を見ると

延々と続いている。一体何キロくらい歩いたであろうか、疲れて歩けなくなった。だんだん暗くなってみな地面へ座り込んで大豆をすこしずつポケットに入れた、監督に見られないように。そのとき遠くの方でオカミの鳴く声がしてきた。驚いた監督は「早く帰れ」と言いつて帰ったが、それからこのような作業はだまされないようにほちばちやることにする。

一日一日を生きることは大変なことであった。月を見ては「この月を家の人たちも見てるだろう……」と思ひ、そして話はいつも帰る話と、食べ物の話、「田植えのときは……」「お盆のときは……」「秋祭りには……」「関東では……」「関西では……」と四季折々の話を聞きながら生つばをぐくんぐくんと飲み込んで食べ物を思い出してみな慰め合った。作業の行き帰り馬糞が馬鈴薯に、れんがのかけらが黒パンに見えた。このような話は我々以外の人に、どのように説明しても納得できないだろう。

食いたい 寝たい 帰りたい

千葉県 庄司 音松

突然の非常呼集で起こされた。ここは、北満州の孫興。朝食などとしている暇はない。連隊本部の裏に集合。そのとき初めてソ連参戦を聞かされた。そのまま五号無線機を背負い、中隊付の通信分隊として、二方山に向け出発した。一方の通信分隊は連隊本部付となり、お互いに無事を折りつつ、荒神山に向かって行った。途中、雨が降り始めた。その日は昭和二十年八月九日であった。

二方山は、陣地構築中で、山肌が見え、上空から山はよい標的になる格好の場所のような気がした。二、三日は平穩無事で、散兵壕に、タコつば掘りの毎日であったが、ついに戦闘機の目標となり、機銃掃射され始めた。そのうちに、敵が私たちのこの二方山に向け、攻撃を加えてきたが、だれ一人怪我もなく、そのタコ

つばの中で身を寄せ、弾の直接攻撃をかわすことができた。夕刻近くであった。敵の迫撃砲の攻撃が始まった。こちらからも野砲を撃ち始めた。迎え撃つ安達隊一個中隊、その後方百メートルくらいに小倉中隊、その通信分隊が私たちであった。中隊長に、状況を連隊本部に電報を打つよう命令され、通信開始したが、相手方は全然応信がなかった。この戦闘で、味方も敵も戦死者が出た。もちろん怪我人も出たが、野戦病院がどこにあるか、だれも知らない。その場で息を引き取っていった。なおも私は連隊本部に打電を続けたが、杳として応答はなかった。後で聞いた話であるが、連隊長自ら戦闘を放棄し、どこかに姿をくらましていたそうで、皆バラバラに行動し、鉄道線路づたいに逃げた者が多かったとの話である。相手がいないのであるから、交信不能は当然であった。

その夕刻であったか、退去命令が出て、次の山、忠節山に向け息を殺して真つ暗の中を行進した。一緒に行動をともした分隊であったが、真のやみではついに私と鈴木国武と二人で、あとの人たちははぐれてし